

# 東大での一生

市川 健雄 (地質学教室)

通称市川少年、boy と呼ばれていた時代、市川君と甲高い声で呼ばれていた時代も、速いものでついこの間の様でしたが、あと1ヶ月ばかりで、定年退職することになりました。

戦争末期から東大に勤務されている方々も大部少なくなられたと思います。戦後の苦しい生活の時期を自分も含めて、大変辛抱強くと申しましょうか、いままで我慢してこれでよかったと、今では思います。

在勤中のいろいろなことが思い出されますが、戦争中しばらくして東京も空襲を受けるようになり、教室も疎開することになりました。講座によって、山形県と新潟県に疎開しました。私は山形県の大石田町という、冬には二階から出入するような大雪が降るところです。毎日が標本、図書の梱包等疎開の荷物の荷造りでした。そのうちには梱包もうまくなり、藁縄の結び方などもおぼえる程に上達しました。今では荷造りは荒縄ではなくなりました。大石田では小学校(国民学校)の一部をかり、大石田分室として標本・図書などをときほぐして、出発しました。我々は近くの寺に宿泊し、螢雪寮と名付けて、毎日交代で食事を作りました。ここでも、食糧難で、米屋から糖を買ってきて、雑炊にしたこともありました。そのうち農業試場の桑畑をかりて、桑の木の下に大根を作り、秋に最上川の川原で洗ったのですが、とても冷たくて、生きている気はしませんでした。冬のために大きな樽に大根をつけて、保存食として毎日食べました。そのうち空襲で大石田でも機銃掃射を受けて怪我をした人もいました。

そのうち終戦となりますが、東京との交通のうちで、汽車が板谷峠を通るとき、スイッチバックにもかかわらず、峠をしばしば登り切らずにもど

ることがあり、乗客はびっくり、大さわぎしたこともありました。燃料が悪く石炭ではなく、亜炭だそうでした。

食糧難の時代でもあり、東京も大変でした。二号館の裏の青木堂は食堂となり、昼になると長い行列ができ、大きな釜で雑炊を煮ており、今日は何ばい食べたとか、今日は箸が立ったとかいって喜こんでいたこともありました。

その後の移り変わりも激しく、今の関電工のところには本郷区役所がありました。郵便局も消防署のところから、向ヶ丘の駒込中学の方へ変り、遠くなったこと、東大工学部の方と変わったことを思い出します。

戦争中は出張に行くのも一苦勞で、米をもって旅行し、牡鹿半島大島などでは、スパイではないかと思われていたこともあります。

やはり思い出されることは、戦中戦後の印象が強かったのでしょうか。この時代のことの方が多く思い出されます。しかし、標本や図書も無事であったことが、一生を通じての大きな慰さめになると思います。一生懸命につっぱしってることができたのは、偏えに諸先生、諸先輩のおかげと感謝し、余力を残さず、一生を東大で終えることができたのはまことに幸せで、誇りと思います。長い間ありがとうございました。